活躍する卒業生　第６１号　平成30年5月29日(火)

国際関係論・中央アジアとの出会い

◇今回は、ＳＴさん（東京大学教養学部国際関係論コース）のレポートです！

はじめに

この記事では、最初に国際関係論（International Relations, IR）とは何かを簡単に紹介する。関高校はスーパーグローバルハイスクールに指定されているので国際関係の学問に興味を持っている人は多いだろう。しかし、国際関係論は何を対象にし、どんなことをするのか理解している人は少数のように思われる。恥ずかしながら私も大学に入学するまでは国際関係論が何なのか、イメージをつかめていなかった。この記事が、そのような人たちに少しでも寄与できたら幸いである。続いて、私が現在関心を持っている中央アジアについて紹介する。幸運なことに、前期課程[1]在籍中に大学の国際研修という形式で十数名の東大生とともにカザフスタン、トルクメニスタンという国に行く機会を得られたので、その経験も含めて述べていきたい。

国際関係論とは？

国際関係論は国際関係（国家、政府間機関、NGO 等非国家主体などのアクターの関係）において生起する様々な現象を分析の対象とし、それらの諸現象がどのように、なぜ発生したのかを検討していく学問である。国際政治学、国際法学、国際経済学、国際関係史（歴史学）などさまざまな学問の総体であり、学際的な学問である。その学際性は私の所属先である「教養学部教養学科総合社会科学分科」という名称にもよく表れていると思う。私は国際関係論の分野の中でも特に国際政治学（International Politics）に関心があるので、それについて少し触れたい。

国際政治学は具体的にどのような研究を行ってきたのか。国際政治学を動機づける大きな問いとして、なぜ戦争が発生するのかという戦争原因論を指摘できる[2]。例えば第二次世界大戦はなぜ起きたのかを考えるとき、ヒトラーのような個人レベルの狂気に原因があるからであるという見方、ドイツは全体主義に陥ったからであるという国家レベルからの説明、当時の国際関係や勢力分布を鑑みれば個人や国家の属性に関わらず覇権（hegemony）に対してドイツが挑戦するのは必然であったという国際システムレベルからの説明、という３つのレベルが考えられる。

このような戦争原因論の他にも、国際政治学は国家レベルに注目して政府はどのように対外政策

---

[1] 東京大学では、１・２年生はすべての学生が教養学部前期課程に所属しリベラルアーツ教育を受けることになっている。どの学部に進学、所属するのかは２年次の夏に決定する（Late Specialization）。

[2] 中西寛・石田淳・田所昌幸『国際政治学』有斐閣、2015 年、122 頁。

を決定するのかという政策決定のプロセス、政治と経済がどのように関わってきたのかという国際政治経済（International Political Economy, IPE)、安全保障に関する問題、環境問題などの越境的問題とそれに対する国際社会の対応などさまざまな事象を扱っている。

中央アジアとは？

中央アジアとはどの地域を指すのか定義はさまざまだが、一般的には旧ソ連を構成していた共和国のうちカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギス（キルギスタン)、タジキスタンの５カ国を指す。世界史では、シルクロード上のオアシス都市が繁栄していた地域、遊牧民が活躍した地域として登場する。汗血馬を産出した場所やティムール誕生の地も中央アジアである。タジキスタンを除く４カ国の主要民族はトルコ系でそれぞれ似たような歴史を辿ってきたが[3]、一方で各々が独自の特徴を持っている。以下では、私が１、２年次の３月に訪問したカザフスタンとトルクメニスタンの２カ国について紹介したい。

○カザフスタンと日本　―核軍縮への取り組み

我が国は唯一の被爆国である、という表現が散見されるが、この表現は妥当だろうか。実際は核実験によって被爆した人々も確かに存在し、彼らを無視することはできない[4]。カザフスタンはソ連時代、同国北部に位置するセメイ（旧セミパラチンスク）に核実験場が設置され、数百回に及ぶ核実験が繰り返された。

セメイ郊外の平和公園にて

（2017 年 3 月）

経緯こそ異なるが日本もカザフスタンも被爆経験を持っており両国の学生交流で得るものがあるということで、私達は 2017 年 3 月カザフスタンの首都アルマティとセメイを訪問した。現地学生とのディスカッションは紆余曲折もあったが、最終的には核兵器は国家にとっても個人にとっても有害な側面があり、核なき世界の実現には私達若者の行動が鍵となるということを確認した。

権力政治（Power Politics）とも呼ばれる国際政治の場において、核軍縮のような国家安全保障が大きく絡む課題に学生が関与するの困難かもしれない。また、日本とカザフスタンでは安全保障の環境が異なり、両国の協力が簡単に進むとも限らない。カザフスタンの場合ソ連崩壊後に、配備されていた核兵器を撤去しさらに 2006 年には中央アジア非核兵器地帯条約（セメイ条約）に調印している。核兵器禁止条約にも賛同している。一方の日本は、核兵器禁止条約は核兵器国と非核兵

---

[3] タジキスタンの主要民族であるタジク人はイラン系である。

[4] この観点から、我が国は唯一の戦争被爆国である、という表現も見られる。

器国の分断を深めかねないとして署名しない方針をとっている[5]。核なき世界という理想を目指しているとしても、現実に対する冷静な分析を見失ってはいけない、ということを自覚しなければならないと強く思う。

○トルクメニスタンにおける持続可能な開発

トルクメニスタンは「中央アジアの北朝鮮」と称されることもあるほど、強力な権威主義体制[6]を敷く国家として知られている。現大統領グルバングル・ベルディムハメドフは 2017 年の選挙において得票率 97%以上という通常ならありえない数値で再任している。ムスリムが大半を占める国家でありながら彼への個人崇拝が進んでおり、街のいたるところで彼の肖像画を見ることができる。この事実を切り取ればトルクメニスタンはけしからん独裁国家である、と考えてしまいがちだが、実際はどうだろうか。

トルクメニスタン外交の特徴として「中立政策」があげられる。この政策の背景はともかくとして、トルクメニスタンは国連総会にて永世中立国として 1995 年に承認されている。中立を謳う国は他にも例があるが、国連によって承認されているのは当該国が唯一である。トルクメニスタンはこの中立政策を基礎に、国連重視、非同盟、等距離全方位外交を展開する。例えば首都アシガバートには国連開発計画（United Nations Development Program, UNDP）、国連中央アジア予防外交センター（United Nations Regional Center for Preventive Diplomacy for Central Asia, UNRCCA）などの国連機関の事務所が存在する。

国連重視の姿勢から、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）への関心も低くない。ここでは、特に SDGs5 Gender Equality について取り上げてみたい。

トルクメニスタンは旧ソ連の構成共和国の 1 つであるという歴史的背景もあり、女性の社会進出がさかんであるとされる。女性の議員は全体の約 25%を占める[7]。私達が 2018 年 3 月に訪問した国際関係大学や国際人文発展大学は女子学生が過半数を占めるとのことである。東京大学の学部全体における女子学生の比率が約 20%にすぎないということを考慮すれば[8]、トルクメニスタンにお

---

[5] 岸田外務大臣会見記録（外務省ホームページ）、
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/kaiken/kaiken4_000533.html　2018 年 3 月 27 日閲覧

[6] 民主主義体制ではない政治体制としてここでは権威主義という言葉を用いる。民主主義の度合いを示す指標として例えばフリーダムハウス指標がしばしば用いられるが、トルクメニスタンは aggregate score でシリア、南スーダン、エリトリア、北朝鮮につぐ順位となっている。
（https://freedomhouse.org/report/freedom-world-2018-table-country-scores　2018 年 3 月 27 日閲覧）

[7] 「Proportion of seats held by women in national parliaments」（世界銀行ホームページ）
https://data.worldbank.org/indicator/SG.GEN.PARL.ZS　2018 年 3 月 27 日閲覧

[8] 東京大学『東京大学の概要　資料編』2017 年、2 頁。
（https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400066194.pdf　より 2018 年 3 月 27 日取得）

ける Gender Equality はかなり進んでいるように思われる。さらに、トルクメニスタン訪問中の 3 月 8 日には国際女性デー（トルクメニスタンの祝日でもある）が大学や首都の文化センターで盛大に祝われた。日本ではそもそも、国際女性デーという日すらあまり認知されていないことだろう。

ところで、Gender Equality はどのように測定するのか。男女平等を表す指標としてよく前述の議員男女比、高等教育就学率などが用いられている。トルクメニスタンはそのような指標で見れば Gender Equality を達成しているように見えるが、現地学生とのディスカッションでは保守的な考え方も聞くことができた。例えば、女性は医師や教師になったほうが楽であるからそうあるべきという社会の暗黙的了解、それに対して差別されているとも思わないトルクメニスタンの女学生たち。私達はこの現実をどのように受け止めればよいのだろうか。

今回の研修を通して私達が目撃したのは主に首都アシガバートと政府が力を入れている観光特区アヴァザ（トルクメンバシに隣接するカスピ海東岸のリゾート地)、そして交流した学生は将来トルクメニスタンを担うことが期待されるエリートたちであり、これらの経験を以てトルクメニスタンを知った気分になるのは些か傲慢なようにも思う。とはいえ、民主主義を当たり前に思う人達が即座に非難したくなるような強力な権威主義体制国家であるトルクメニスタンも持続可能な開発目標への鍵となるような個性を兼ね備えているのではないか、ということが今回の研修を通して確認できた。私達を含めた先進国の人々は持続可能な開発のためには〇〇をすべきだという暗黙の処方箋や規範を持っているかもしれないが、それらの方策が自明とは限らない。もちろん、トルクメニスタンのやり方が全て「正しい」とも思わない。だが、政治体制、文化、規範が異なる彼らから学べること、気付かされることは少なくなかった。

おわりに

前述したとおり、東京大学は 2 年次の夏にどの学部に進学するのか決定する制度（進学選択制度）があるので、約 1 年半の猶予があった。高校生の時点でいろいろな方向に関心が向いており進路は〇〇学部と決定し兼ねていた私はこの制度に魅力を感じ、東京大学を選んだ。結局、教養学部という学際的な学部へ進学することになったが、今この文章を書きながら、高校でのさまざまな学びが活きているということを痛感した。

・国語：学術論文を正確に読み取ったり書くには現代文の能力が必要。

・数学：統計の分析をやろうと思ったら必須。文系だから、経済学部じゃないから不要、なんてことはない。

・歴史：国際政治学は主にウェストファリア条約以後の主権国家体制を対象とするが、世界史のおおまかな流れを掴まないと理解できない。

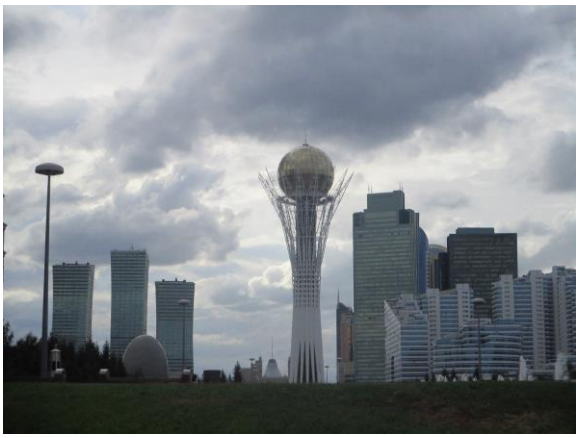
・倫理：例えばホッブズ、マキャベリ、カントらの古典から示唆を得る場面は少なくない。

・政治経済：国際政治や国際経済の勉強の前提となるような知識。

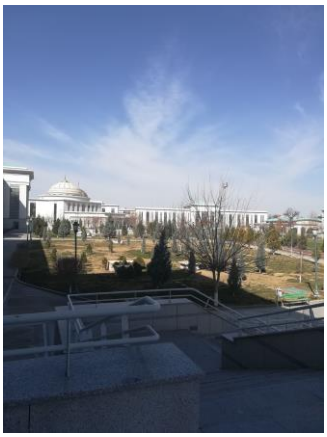
・英語：国際政治学に限らず多くの研究は英語で発表されるから英語が読めなければ得られる情報

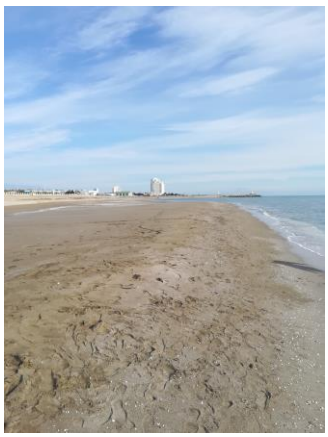
は減ってしまう。

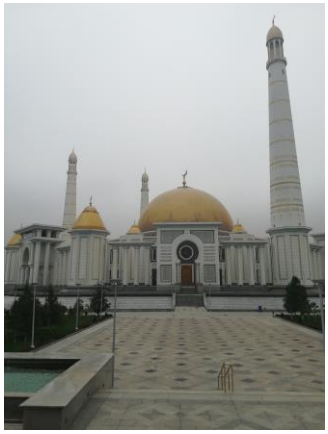
【カザフスタン】　　首都アスタナ（左）と国立大学図書館（右）



【トルクメニスタン】







上段左から。アハルテケ（汗血馬の子孫か）。首都アシガバート。国際人文発展大学キャンパス。カスピ海。

下段左はキプチャク・モスク。右は世界遺産ニサ遺跡。